



• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 JAPAN TRAJIMA

青砥藤綱模稟案後集卷之三

曲亭馬琴編述

東都
二支川の下末

親族も離れてゐる。讐言敵も食とあり。誰うあります。善吉と鶴太郎へ
促母昆オナレども幼稚と見離散して遠ふその面を認め。一個の孝子。
一個の孝親。そのきと所異ふて彼ヨリ利の爲よ人と賊人と交渉す。此ハ
害をもそれで夜寝うくる。犯せ一科へまけども仇よ追々ことりやとそ。
意言のその夜さう。辛にして山に登り。又ぐるご數町まで左右をぐる
る。東へちぢがひよながひぞ。叢の杜の中。小山神廟あり。あくまけと
あり。樹洞とうち従うて社壇の裏をくんで。破簾月を
引て燈明火換がく。懸魚兩が朽て梟を柄もゑたうし。風の木葉を舞ふ

賽錢を散らす。旅蹟を印して、蒸氣を画くか似たり。神祠ありと

りども、散ちられ、威を失ひたり。旅店うりとりども、想はれが疾や
補足とぞ。わすりの身のつぶし。仰け月も傾きて、又三日もや過
よう。且くこそ小明えとて、古廟の中へと入る。大山祇の冥助を行り。
厄難消除と念むる。秋の夜、千歳と長くて、暁もすうべくすゞあけど
一晩を千歳とまゐる。山河の音凄ぐく。岸堰水とづ胸と碎けそある。
涙あく。さしく袖と毛皮うめど。おひつれて、身と倚る。壁よかれでゆふ
ともあらず。要安時日睡る。着ふだ方を仰ぐあひで。こが身と鳥帽子と素
袍あく。と遅れぬ馬ふうちらかう。ひとり曠野ふ生る。前面か流す。あ
ありて、汀より枕川と榜示と建す。その水一面よ冰つゝ。と厚く見え
あづぶ氷の上より馬とまゐ。北より南へ涉さんとする程よ忽に水中

両の日輪因縁とて、ス水中へ没とす。氷へ轟て烈轟と碎て、水二條ふ
原きる。人馬の死とも水底へとまゐる。沈むことば。愕然とて驚か
る。こは南柯の一夢なり。肉動と胸騒。とて失人所ある所へと。こう外
て、とくらども、向て慰める。うちの累。禍災の神の祟るあらじや。
と、ちぢみ限つたけれど、夢の五臓の骨が成ると物歎くる人を
ひさす。あまくか劬勞もんべること。かるるゑひとびけめ。意厚よせび
何くあらんと急切ふらひて。塵搔掻て、搔櫻て、神前よ額と
つれ久後事でのまきと祈る。天をせしやくふ明かり。こようとす
野上へゆく。のうけん果をあぐけよ。とくへ昇り。のくは癡者を相
外ふと。がまきと。痴とおやせん。金と六よ官と。おとげ。旧里へ
ゆふまじ。と肚裏にて、ゆ念つ。朝霧ふるひ下と。其外うことだらう



越てやく。園の藤川へ出まけり。是より熟路されば只管ふきうつ。この日
午の貝吹て。土夫の里ふ入レしき。あら村長上臺馮司（かみや）宿所へ立つて。
ゆのうを報告。終不異る。家小ありぬ。する程よ遅也。阿丑の豫て善士。謙
食う消息。て。歸郷のる報告。れど。まのふりと。おひうび。うちも教る
あよ。恍忙つ。出迎て。ちう足と深し。貴子の塵埃（じんまい）拂ひ猛々曲突。子
柴わ焼て。賓客（ひんきつ）を歎待。ごく。恙うれと祝。祝され。旅寐の疲勞を向
慰め。るどす。往ふ里人等。もとやきて。おのづ。宿來て賀と述。とみだ
りひよる為体。その樂融融。う。さて。も速也。阿丑等。すへ。待ふ。不。五年を
ひそみて。送つ。只。苗字あるのみ。されど。吾。音。が。濂舍。よう。衣食の料を
贈りしき。坐て。食ふ。餘り。あつ。さへ。宿願成。経て。此度。ゆふ。なび
て。物。夥。齎。いね。と。豫。う。ち。よ。無。ビ。只。身。ひ。と。あ。て。ゆ。う。ふ。け。い。ば
之のところ。を恨。う。り。り。と。ど。戸。宣。へ。人の出入。よ。と。ま。る。て。ゆ。む。房。も。日。没
果て。若。主。の。妻。と。女。び。姨。小。舟。ひ。て。そ。の。舟。漁。食。ふ。わ。り。日。の。る。う。友。途
よ。う。癖。者。ふ。伴。き。困。ド。果。と。る。の。な。く。昨。夕。野。上の。旅。店。も。盜。難。を
脱。ま。ん。爲。懷。る。金。百。千。匁。と。下。女。お。六。と。の。の。よ。あ。べ。管。り。て。ゆ。じ。と
肩。と。う。尾。す。で。物。の。ふ。阿。丑。が。妬。む。こ。の。や。と。そ。お。六。が。素。生。を。詳。み。よ
り。ひ。ぞ。ほ。い。彼。女。子。が。後。日。の。登。拵。よ。と。し。よ。る。玳。瑁。の。櫛。と。と。と。も。お。見。底
え。せ。穿。り。の。ひ。や。だ。獄。も。あ。る。人。お。ま。と。讀。か。ひ。つ。は。と。今。あ。う。つ。これ
か。かる。翼。と。獲。び。の。生。て。家。み。ゆ。か。け。ん。こ。の。櫛。う。た。り。の。と。ど。も。
百。千。金。の。ひ。形。そ。じ。五。口。脩。み。づ。く。ら。野。上。へ。や。とも。こ。の。櫛。を。返。さ。れ。ば。金。も
又。返。づ。か。づ。と。私。と。ぐ。れ。く。と。密。着。へ。逐。也。阿。丑。の。疑。ひ。釋。て。数。回。歎。息。し。
旅。か。渡。た。の。底。と。う。ふ。偷。見。ゆ。と。豫。て。ま。う。螢。が。塩。燒。く。か。見。せ。よ。百。五。

十兩失ひタガ。弥勒のせや。その金よ。往てぬさびあひきけん。さても
危うきところ。かくは併亡犯と。つるの間も。とひ志を取。おん身が戒を神も
覆う。佛も憐みゆふこそ。と真実ざらそり。母の名も。阿刃より櫛を。
よしんからくと。金うけど。さく形とする。宣ふと。あまの金も。今宵へ
家廟へ供ひ。とり。が景をうち思ひ。現この櫛の置ところ。家廟ゆまつ
せむ。さてみて。みづから櫛を取て。父母の位牌の右も左に。すこち。西安時
うち金をうなぎ。寝よとの達ぞ音を。おとす。おとす。道を。うら。癖者あ困ド
モ。ひき。かまう。かまう。果て。一夕の目睡だ。すまやく家ふゆりて。忽だよごろ寝そ。さく疲勞を
おじえ。さがすか卧房ふづづ。暖もあらず。熟睡せーぐ。起ふ。どう小
日ひと高う。遠く。喙を。家廟と拜んとて。裡を。ふ。昨夕かまう
櫛。かく。かく。うち。うち。そこあやう。おう。妻ふ向姨よ。おう。が
櫛。かく。かく。うち。うち。そこあやう。おう。妻ふ向姨よ。おう。が

遅也。阿刃も果て。りうともかあき。ども。険き家廟の裡。うふ。こ
やどふ。隈も。當下。阿刃。眉と額。こま。背せ。下壇の。よ。扇の先の
倣り。かく。扇を。ひくねけん。とり。が遅也。ゆこ。祀。現。阿刃が猜せ
どく。油塗。る。玳瑁の。櫛。すれ。ば。も。わ。す。ん。昨夕扇のあれ。うね。ど常の
みうね。が。起。ても。い。ど。櫛と銜。も。す。と。寝。ふ。ど。あ。う。ど。彼。外へ。やりて
やれ。う。と。や。あ。と。三。人。と。棚。う。る。物。を。う。あ。し。室の四隅。簾子。乃
下。う。で。殊。そ。隈。う。く。索。ま。と。只。ひ。づ。く。小。時。の。う。う。つ。て。日。暮。と。ア。ま。と。
事。午。へ。る。す。る。お。刃。へ。鏡。ア。不。後悔。二重。三重。う。ね。よ。納。きて。和。ち。ぐ。ぐ。
あ。じ。金。の。手。形。の。櫛。う。れ。ば。家。廟。ふ。供。て。う。れ。ん。ふ。あ。歎。一。す。れ。ん。と
う。う。う。う。う。小。効。り。う。疎。う。所。行。き。て。け。い。ど。い。と。面。う。げ。不。う。れ。口。說。ハ。言。若
恨。う。氣。う。も。う。う。れ。む。身。が。悞。の。う。あ。う。底。つ。も。扇。グ。ひ。く。と。一切。ひ

かけざつた。すや被櫛失うとも。ワヨミヅクノ野上へかたて。ぬ白木縁由と
告ふ。金を返さド。彼女子もりつてひづき。ちうへあれど件の櫛が殊ぶ
極意の物うよしを。ちうつてと失ひて、ひと面がせうる所為不こそ。入る
櫛をちくもあれ。緯忽あまびにとて湯漬の飯の箸もさうあへぞ。
裳を引おて忙しく。野上を投てゆ。往よ三里ふあまく道す。ばりそぐと
それど秋の日のをや西へ頃くこう。すやく彼外へまう著て。与妻が門を
みいえまう。ここけとらども。菊の夜のこと。新護て。の外面よ立在を。
その人すととそけきば。お六をすてまう坐て。物陰へ振れ入き。のるづり
けり。忙く來りひる。と内くもこうぬくと。すげまの。差う。二丈へ
ゆじて。報告。櫛を扇ふひれうる。緑由と親あじ。しん家母の紀念を。
年來極意あすふ物と一夜の中失ひぬ。とりとも面うれ所為る。匿

果べたる。腹たしを推すれ。勘解る。すれ失ふ。狗くまく
限き。照る日の下ふ立。どもあれ今いの所詠みく。つめづくも傳う
る。櫛の代え。何よあれ。裸する物と進へ度べ。彼金返一鳥う。どくべ
か六を眉を簾め。こうぬとつづきよ。金と。櫛よ返へ。櫛へ則くま
あ。どくひつ。ひへを抗く。脱ぬて。こ一出せば。音をこすをとく。かくふく。
果く。半晌をう。又り。すゆもみうり。當下。か六を。音を。身を
ありて嘆息。原見。かん見。光棍ふ。入襷。すれひよ。け。亭午の
比。笛。箇様。もする人來て。口へ。音を。鄰家の。あ。ド。孫太ハ。といふ
りの。こと。いね。夜の。る。表。若吉。みづく。ま。べ。く。ど。づ。ふ。せん。嫁。る。人。
七月の。下。寝。う。長。病。苦。ふ。卧。る。が。彼。セ。と。こ。不。ゆ。一。夜。急。死。緯。断。れ
よう。が。ち。わ。よ。強。き。て。一。切。る。の。怒。と。され。が。と。そ。今。日。の。日。の。音。傳。彼外

やゑびき。小和駿野上へ赴きて。こまとのうれをもじ。金を乞ひて
来て。ごの櫛正に燈籠あるふ。これどお返せが妨る。やうくとりすよ推辞
がくて。かく竹くみつゝ。さればええと吉と行馬の友。さうが。あらわ
おまことからおよりくとも。さうやうるかのふとそつる夜。管あゆ
たる百五十金を返す。櫛を返すやうもと。真すよ述べば。
あらすじたるもの候だ。うの櫛どお返しゆく。がんおみづくらす。あらすじ
とも。金を返すやあせんと約束あつて。ゆくと今まくぬぎと疑ふ
べた。されば櫛とうえぐ。金へ財布ふ納す。假彼孫太へ小返すせし。
りとよきをやもあ。アレ。鄰家うる人ちよ。二丈の里小孫太へ。名
告くるもの絶て。且。已が娘の善き。て。今。の。自家ふとぞうりの。を
ゆきのう縁由。かくちふくちうて。櫛を。盗アラケン。顧ふ不
ある。夜。がんおとづれと。櫛を。約束よ。金と櫛と。せんと。彼癖者
竊聞して。その夜。さうじが迹と。跟櫛と。盗。人を。脅。まく。お身と。欺た
れ。燈籠の櫛と。等。用か。て。盗。と。されば。今。更。ふ。人を。恨。つ。よ。も。わ。ば。
やうんと。一。昨。の。夜。松山古廟。ふて。如此。くうる。爰。と。よ。う。ゆ。く。も
つても。彼。金。へ。こぶ。牙。小。馳。ぬ。り。の。う。じ。と。ひ。う。あ。ぐ。嗟。嘆。と。金。
き。六。八。歳。尋思。て。い。ね。この。櫛。を。偷。え。別。人。を。い。ぐ。し。誰。う。あ。ん。か。の
癖者。へ。こ。の。あ。じ。が。赤。坂。よ。あ。じ。と。え。主。の。金。六。七。両。を。盗。と。う。て。逐電。
叔父。と。債。と。負。いた。丁。見。鶴太郎。と。う。ゆ。と。丁。の。寘。罰。修。と。縛。を。る。ど
そ。の。夜。がんおとづれと。遣。過。て。背。門。の。ゆ。と。追。ん。と。して。や。杖。よ。跪。ま。が。り。ど。る。
竹。縄。と。踏。抜。て。忽。ば。ふ。擒。と。あ。い。ひ。と。主人。よ。懲。と。れて。や。や。く。放。せ。れ。れ。
天。明。て。ほ。の。ゆ。う。し。や。旦。が。がんおとづれと。蹟。と。跟。る。つと。ま。絶。て。う。れ。り。の。と。

りへ景をぬるび尋ねた。その鶴太郎とつつかのへこぶ姨の家子うきん。
彼が爲ふ債を負ひ。叔父へもみちつゝがえし送よ面を認らねども。むかと
りべ従弟おぢち。妻の足あゆ。鶴太郎ふ信濃路へ苦ひのれ。只假初不
りのつする。おん身とて小環會て。その夜の危難と救はす。善惡邪正
親疎ふよしだ。縁故の圓様。こととて面りげふ物くれべ。お六共よ撃
嘆い。おひりみど。おぞくいふ。つと慰うゆるが。又且く尋思へく。やよ
若きぬ。おみことひ屈しゆる。此彼子の趣をほくとおひやす。櫛を
盗てりて來し。彼鶴太郎が丈黨の光棍あれど。これハ正く
鄰家人の歎き。もと里人ゆる。しりこの賊をあまん。圓様
箇様ふひひこら。明日つとめて里人を残す。聚合あり。そのとて
口とへ密やか二夫川へ赴きそ。おん身が宿所の外面う。聚合一人を
網窓ゆく。りその中ふこの櫛を。りて來くる人あぶ。彼金板をび返す
が。おなじきてつよけだ。櫛よとくば獲らし。わゆ。まうれどもこのよ。
彼賊をあまう。おん身も告げ。又鶴太郎と捕へ。おん身がとれ
明白。主人よあくせびや。ともひびしげ。つらひをぬく。おきて。夥の金を
領う。おふ不得。お偉を洩らさば。金をあまえり。禍を釀し。やせん。
慮りてつづり。今宵詳ふ主人を告へ。翌へ一日の暇をあらう。以二天へ
あるさん。やこの櫛へあつとも。その賊をあらう。おん身が疑ひ
つづえ釋べ。努こゑのれ。洩らす。と密語べ。言ふ有理とぞ。とて免て
曉うて。お六が才智を感佩し。猶も疑ぞ。月のよれ。牒合て。又遠く
きつかり。お往還七里の道。りんべつ。往も。日暮。宵闇。りきよ
たゞくも。その夜亥中の比及よ。門をとと敵く。おぞ。姨女房へ言ふ。お

と。手をも精て戸を引ぬ入るを遙と因雪つづふぞや妨るく。
金取受やアのひー飲食をたゞめどや。わやーくへとまどよ。と
向が吉政を掉のれねゆへと。頃の日のみどりと急ぐとそれど
四里が往く野上までゆむつで。山中村の屋とうも。とび日へ満てん
今須巣もありのせ。夥の金を懷ふてひとろ夜行もる危ト。つあを
取るふ。今宵ふ限すと。とるひうて彼外へゆうと。途うとゆす
老とつべ阿久の事もこそと。母りうともふうち急に現ゆる夜の工る
あれば暮てんむりとろくて。甲夜う。冠子サクタクふ。門邊よか又入る。
尻もちらかど行ひゆ。更闇うふ麻ゆうきと。ひく妻が消え
門の戸を漏る風寒の虫の声。枕かゆくもひづく。しかし音を。落朝
娘と妻とふ母ひてひゆ。五口骨々く。薄食よあつとつども。家の不景

あひて。あゆむ妻子へや。やまと。悪うとされし。工村長上臺父子も
さう。善吉氣撫びし。里人の庇覆ふうれ。野上のゆもひがれど。りん
黒人を呼びつけて。旅うの盃を勧めをやとおふし。これらは准備もひ
往と叮嚀。小ゆえむれて。う。馮司が宿所へり。又里人の家毎と。
緯の飯をぬきあはして。遠くきよ。飯を炊き。酒をあく。今と
は。いふ上臺馮司と。その子昌九郎を先またて。黒人ふ二十餘人うち
れからて。續來。或へ悪氣ぬ材を。或へうの好意と。多く笑ほ
二側三側かひれ居て。右へ巡じ。左へ巡る。盃の数くさう。ちく笑ほ
會があつり。當下。吾意。酌を執る。娘女房を。あら。後方ふ居る
せ。席の真中へ進む。頃日へ人も我も。田を。稻と根くわるふうら
そろひて來させ。と。詠びこよ。何えよ。あら。心も寒ぬ家ふと。

貴様の儲ゆゑくて進むべれや。但一ヶ月の歎待小一條の内
かうあつ。結りてゆきとくにび衆皆うちらう笑み。そん一便あつべ
四五年。縁金ふ在。一えべりづくる。お怪夥あつさん。そんく笑ひと
くまきを扇せとく。されどよ某縁金ふあじとれ貪ふとあわは
ども主の老が黄金とくして月日と共よ積まふ。百五十両の家裏ゆ。既
今こまとりて舊の田園を贖復。家を賣つて亡親へ孝養不極んとて。舊
里へゆ。お途よえ棍小限られて一步の間も立ちかど。せんとくうて彼
金を野上へ遺してゆく。辛く盜難の脱よすれども。又一層の患をぼて。
墓のくも件の金とみのふ畧奪ふ。その左の箇様と。とか六、七と櫛
のく首うり尾うで。立ちゆく。ねくらべ衆皆耳を傾け。うさふ
驚嘆。そのゆかのう彼櫛と盜よそてゆてめでけん縁故をもすのあら

ざく。とほくとれば。あふ苦こと。面をあらして忽地與を失へ。村長
鴻司へとどめよう。つとと吹て肩根とよせ。事の迹と察する。その探
見奴へ別人を。彼旅店の下女うぶ。じき比く伸うせ。玳瑁乃
櫛の衆もあつる。あつれびその夜登据ふとて。お吉とれ主よ通させ。櫛と
失ひぬと。ゆく悪く崩し。這奴とく倒する。櫛とくせて。金を。櫛とくとくふ。
あや返せ。あんぞくふ。これとく。ゆく虎落のそらう。庚申祭の夜
あ。世の胡慮と。あんのと。おハとやうんと引とく。葬と穿牙鑿せど。
葬立地よ。腰向うんと。ま実。まうそのふえが側。冒九郎へ小膝を折。口ぶ
太人の首。所掌を。持も。ゆ。ねよ事。底ふど。國の字。まふ術。お六と
さんと獄舎を繫。火水の責ふあへせう。が。ひとそりで己づき。併

こうもひふよる。あねひねじと咳け、遙也阿刃へ後方より。吾おき
袂と引ひき暁ア申のどや。上臺ゆの推量、的の家中小竹口は村長
きり狛族。憑ひがる奴遂さん。腰の金を失ひゆどら。昨夕ハ野上へ
やまとそ。詐欺をふこうなどと左右う怨ぞれば。吾音笑て冷笑ひ。
の極みをひいて。件の拐見へとあえよう。とづべ衆皆隠を隠
す。拐見のあれと欲しへ欲なる小こそ。が六と申ふい欲その名を喰
べの遺憾。後悔へ特よ姦ある。物をうと有して今一度見る事。とあく
膝を廻る。ぬまび笑坪ふへじく。吾音もうち笑え。あくび目今
名を行べ。件の拐見へ別人をもだ。上坐小さくあた。村長座乃愛息
昌九郎小疑ひ。とつせもあいぞ昌九郎へ折敷機遣りそま出。童吉
昌九郎へ乱ふあすや。酒酔の席とぞ容赦へせど。ゆえまざめて某と拐見と

ひひ。それ笑へと眼と瞬り。敦園へ馴同もあし。昔者を。あくべて声をあり
立。拐見黙と大人気な。言を殺て若者。ぬま衰と被そと。ちりべ因縁
あをあく。彼が祖父樂善と。つぐ父へ足かきだ。あくふきの子。吾古ニハ
墮弱なりのうのう。年とふ微碌と。村長も筋動く。こまく奪ふ
ゆく緑とも。守の仰推辞かくて。こん村長をうけめう。かく時めを免めと
えて。恙むの世人情。そればよや。又吾ニハ墮弱を。家へ衰へ。村
長を執りうる。こまくもひがと。竊ふられと恨む。あくふこの巫言をうそ
みやあんさんべと。一郷聚合へ席上。こまく子を拐見とかられて。馴同が
官袴も汚る。惡名。そぶやく。みの穂。かく。やよ音を。汝昌九郎を乍
拐見といふ。正へ。登校する。次審ふと。まとう。りつよ所胡乱。がこの
席をたせば。後まつる。と。冠と子が。左ひ右ひ。勢ひ猛く。競ひ

幕き。妓女房。里人。木も目をゆうそ。只ひふ握る汗ととりふ。生てからは
一言。そりて返す。こと附め。玉を石疊ぐ。氣えもるく。あれがまや上基ぬ。
正く賊を辱ひ。紙疊かうて。あらべま。とこゑと。とみを拭て。外町を
さ。振げ。生垣の母とす。乾搗の蔭ふ躲ひて。前より得と。内窓を
ち。六も船でまひて。縁嬢う。縫入。片りと。金釋て。延也がほとう不
堅と。食い。阿丑の共ふよす。て。こ。乙女と。などうふ。胸うち騒ぐ。親とす。
額よ煙火のタリみだ。う。敵ひし。光景よ。そ。きむや。曉うて。備痛く
う。の。の。向うも。さうけ。あ。六。頭ふ嘆息。下。め。そり。が。主従を。と
ち。又の後妻ふ。みだ。母。姉。と。慕ふ。わ。づ。ま。と。され。病體ひ。夫と
棄て。女子。りう。共妻。修。と。遂電し。恩ふ。負ふ。仇人。と。善吉ぬ。の。妻
タリ。娘。こ。も。環う。あり。と。夢。む。あ。も。う。既。よ。女子の。養。縫
面とあして。陳。どう。よ。辞。あ。じ。ち。手。野。上。へ。來す。て。づ。の
景。す。竹馬の。友。ま。る。鄰家。ふ。住居。する。孫太八。と。り。よ。り。の。く。ま。き。み。が
く。ら。來。べ。う。し。ふ。妓。る。人。手。あ。く。ぬ。ほ。の。と。何。く。と。落。る。と。ひ。い。と。ば。る。
い。有。る。夜。領。や。お。じ。る。百。立。金。と。返。す。と。ご。す。秋。の。即。この。柳。き。と。柳
と。金。衣。か。え。く。ふ。ど。り。く。せ。も。果。ぞ。冒。九。郎。の。眼。と。瞳。ら。席。と。拂。舌。長。れ。街
妻。が。ほ。い。え。あ。ら。く。う。お。し。る。人。ハ。世。不。往。く。あ。り。れ。生。ま。一。七。夜。の
比。え。冒。九。郎。と。ゆ。き。の。も。孫。太。八。と。り。よ。り。の。紙。あ。う。だ。次。て。櫛。と。く。え。く。ふ。

摺稿集卷三

奸淫と
善吉
金を取る

かくふ

かくふ

お六



里人

善吉

う木屋



里人

村井傳司

里人

昌九郎

若者をもが當する。金を畠奪へとれ。跡もゐた裡言う。女子ふ仰げるに
大膽不遜。若者を憑きて居。汝一己の所行あれあひド。及づ取ことを
首伏せよ。声高女小罵まば。お六とせん余とうち笑え。かくまで小伎俩
の氷をりて炭との石をりて玉ともいはん。や人を欺くとも。欺犯が天
の冥罰が下とみあひて。まのふ捨ひ。也こそやれ。も所ある。もゑふ。
若吉ゆふもひまご告ごと。おびこまと。のち。あそ。もくらう。りうち
艶簡とぞり。完名がとぞり。九郎のゆく密ふんたまく。刃より。一封の
返し。冒九郎が。そまこと。おきてひ首拂ひて。若吉艶簡をか。聞れ。首より尾
そんと。阿丑を破と衝除て。若吉艶簡をか。聞れ。首より尾。やどく。
高女ふ續。毎小人も果見。つまも果見。わと。おた。かと。のどく。原木阿丑がこの
年未。冒九郎と窓通し。件の櫛を盜み。そく。密失。よこまとよく。お六と領
り。金を畠奪せ。は柄へ件。この文面ふて明るり。妻の胸ふ。白刃
あり。親戚の腹ふ。毒石あり。現あそぶ。きんどう。つまり。才女の翼。と
獲。奸支淫婦のゆふ死ん。嗚呼。危き。危。よし。口の管ふ。嗟嘆
く。ろひ捨て。あやか。のれ。遺恨とさう。そと推量る。里人ホへ目と注く。
舌と巻て。もそく。ふ。冒九郎の席。おもぬ堪。ど。竊ふ逃。とまく。しき。が。
馮司の矢庵ふ跳。墓て頭髪を廻。膝ふ引。著。やされ。冒九郎。世俗の左
言ふ。牙の中の腐。と。殺。含。ざ。が。その毒骨ふ。入。と。り。よ。更。よ。没。が
よそじ。村長の子と生。よそ。物の善惡と。あ。ざ。よ。犯族の妻と奸
通。て。剝。金を掠。と。し。そ。の。罪。い。づ。き。辱。と。せん。が。残。怨。の。癖。者。と。
お。子。あ。と。と。き。せん。や。覺。期。せ。よ。とり。た。や。な。つ。又。放。回。打。懲。せ。ば。延。せ。り
阿。多。が。項。上。投。て。涙。と。共。よ。声。と。ぬ。し。くる。よ。ぬ。か。も。羞。と。が。あ。る。や。大。自

物道よりぬ道を迷ひて。女兒よ迷ひて不義淫奔とまつて死があせう。
と善吉ふらりれて。五年苗守せり。ひもほじり。巴憎。朽を。と含むる
腕も痺痺する可。簞子小額を搊著て。然く胸の早蕨や。巻をあびて
打んと打んと。お六千と。遠りて。や。僕のりふとあり。と尊す。よ身を羞す。
返せ。ゆ。忽地隠と。低。問客。ことひを歎き。が。六千と。さんうて。舊き
帰。ある。人よ。耻か。すまへて。ろみど。まつじ。彼艶書。と。回り。おさざれ。
白一黒一と。確う。こく。金受う。うて。ゆる。と。途ふ送せ。物ゆう。拾ひあげて
こえ。と。こく。ふ。あ。れは。俩と。書載。る。男女の密書。り。原素人。めし。の
ハと。名。き。う。つ。金受う。うて。ゆる。と。途ふ送せ。物ゆう。拾ひあげて
き。と。こく。ふ。あ。れは。俩と。書載。る。男女の密書。り。原素人。めし。の
言。吉。ね。の。ほ。よ。あ。だ。祚。欺。ま。あ。と。や。曉。て。百遍悔。千遍悔。と。や。時
う。そ。逐。ふ。よ。う。ひ。う。お。と。よ。お。吉。吉。ね。が。ま。ち。ひ。て。擲。を。家。廟。

おれ。ころ。隨。暗。夜。扇。か。ひ。れ。と。賠。活。の。ふ。と。そ。や。艶。書。の。ぬ。ー。を。
癖者。とも。大。く。精。け。は。ま。と。ど。り。や。う。し。く。縛。を。洩。さ。が。彼。金。返。よ。う
な。が。じ。と。慮。う。て。ま。の。み。へ。い。が。ぞ。如。此。と。と。縛。一。ゆ。て。り。の。因。坐。を。闕。窺
つ。送。ふ。賊。を。怒。る。や。あ。よ。と。ヨ。ク。責。て。も。猛。く。却。エ。レ。と。賊。う。と。罵
られ。て。納。も。う。蹟。と。あ。る。う。水。莖。ふ。洗。ひ。流。せ。妹。脊。川。さ。う。で。う。み。り。ぬ
よ。あ。の。穗。よ。あ。る。と。ち。の。ぐ。う。水。の。ぬ。れ。衣。の。乾。う。ど。これ。己。と。そ。ぎ。ざ。れ
の。と。快。と。へ。ど。ひ。け。だ。父。の。為。あ。恨。あ。う。家。の。為。み。仇。う。と。も。稚。れ。と。怨
を。あ。し。母。と。呼。び。る。人。の。女。見。と。眾。見。して。の。う。せ。ん。景。吉。ゆ。の。ひ。り。と。そ。の
艶。簡。と。彼。金。と。送。代。ふ。怨。と。棄。て。舊。か。き。り。て。あ。り。と。ば。げ。う。の。幸。う。と。う。と
み。紙。か。た。う。裁。断。ふ。延。也。馮。司。ひ。よ。も。ま。と。里。入。頃。く。感。賞。く。衆。皆
一。齊。勅。解。る。か。ぞ。吉。且。て。易。思。て。ワ。且。の。紙。好。む。わ。だ。さ。づ。彼。金。を

逐々すくすくにして後のちよ御まつあつ。といふ衆皆飲おひびて送お見耳みみとぞうらへ。
従まつて馮司ひき小耳語こみみば。馮司ひき咬かみてうち兵ひし改里人かわらとす残のこ畠はたけりて。昌九郎まさくにを
歎あもく縷あもせ。八九人はくとおそ遠とほく。外面ほかへ走はしうき。且またして立たゆ。懷いだる
財布ざいふと手てて。若わかきうふをかた面おもては。蚕屋くはやぬ。近ちかうの連歌れんが小吹さく。
偷ぬき見みとぞくとて。又またひづ子ひづこと。馮司ひきがうごうと。いふふ仰あおく。又またひづ子ひづこと。昌九郎まさくにが葛籠くらわの
里人さとひとホとねて。某宿所めしゆへきうゆ。彼かれと索さうべ。冒九郎ぼうくにが葛籠くらわ
庵あんふ栗くりと金かなあつ。彼かれが奪だつひひのうぶ。員いんあくまて納なめ。といふ
言ことをひふとて。財布ざいふのきよ總さとあつ。あくべ金かなと對たいはか一断だん。
ひづくふ數かずへ果こゝ。神妙じんめう上墓じょうぼぬ。百千金數かずむなづづ。一郷いちきのせうる
りの誰だれも。あくべあくべり。又また男おとこ見みう。報ほうひとせん。と身みと起おこ。問ただ
が肘ひじ立て。昌九郎まさくにが身みと推しのえ。相罵あいのののて好文すき。夫婦ふうふの縁縁ぬ
け限ゆき。離別り�の状じょうと。すやうて。密山書ひそやましょと。假與うそよ上墓じょうぼ。これを
何なにと。えむひふ。野のふ主ぬしと駄たりあれば。圍入いりにゅう得とどことを畜くひ里ふ不夫ふふ。
婦めわれば。媒妁めしやくるく。あれと嫁よめと。今若わかき。棄きする妻めと。村長むらな。捨すく
えと娘むすめひ。猶おて。その子こふ妻めータタ。已まが娘むすめ。已まが嫁よめ。後あと恨うらみりて
の死死。といふ。衆皆しよぜう進すすみ出だ。若わかき。やくの模もうもよ。脇わきみみ。腰こし。背せき。口くちで。咬かみふ
べ。男おとこ。りんが氣きで。喰くふ。世よ妻めと。竊くわく。妻め教おし教おしを。男おとこ子こよ。之のを
鼻はなも。よき。而ひて。幾いくハ脱ぬけ。又またはして。いと廣ひろい。狗いぬの海うみよ。浪なみ風かぜよ
せ。そ。されば。うそんを。捨す小舟こぶね中なかて。碎くだて。密ひそまよ。あれと。宴うたげよ。其そのが。か
量ひろと。が。姨よめ。あも。ひづく。ゆく。わづく。阿あ刃の刀と。袖そでへ。よまれ。やられ。姨よめと
追おふ。そ。あ。ゆく。今いま。お。阿あ容の。と。この外ほかで。居ゐ。が。か。ん。毋むと。持も家よめの。新しん婦め。席せき。昌まさ九くに郎ろう。ぬ。受う納な。と。お。め。で。た。と。教おし動おど。ど。奸くわ。

うきうてみづくまを好意へ詫び言ふがお禱りや。禱乃
清濁忽だかられて不召後は神と奉ること毎日も六のたゞトシより
あぐこゑとて上坐へ清とすふぞ。鷲太郎すやすく所を握
幼稚とて事トシれても犯とおりべまつりそ。母の歎トシも妹トシがとも。彼外
笑て下トシてある。つまぶらこの事トシ。アラタナオ長て。十二のとて主
の金と盜トシて逐電トシ。信濃路トシか床長トシて光棍トシの大將軍ふ。さうも
果せ。矛の悪業又トシの愚トシ。外父の子トシりけの善トシと。それと
あで途トシ苦トシ。刻舊主の家トシあきと野上の宿トシそ奸計馬トシが
狂トシて捕トシられ罵トシえても遠トシへ去トシ。入の登森トシて悲トシて。日トシ長トシ
せんと彼此の里トシを傷トシてけよこで。ぬそび舊主トシ捕トシられ。とくに受け
妹トシが陰委トシ下トシて怒トシ。母の息。若きがくくと。膽トシの傍トシよりむろ。人の

悲トシて我悲トシの今トシ悔トシ羞トシ。ごで糸改トシ。木トシ棟トシのわトシア
奈トシれりん。どもひくせぐ忽トシやよ爰トシの覺トシるこじて置トシとこう見トシふの
牙體トシ只願トシくへ善吉トシ。従トシの好トシふ道トシと。犯せ罪トシと絆トシしゆ。母トシに
女トシわけあひて。どもか則トシ一期の別トシす。矛の後トシ一遍の回向トシあてたり。と
涙トシと女のふうに口脱衝トシと立て縁煩トシの柱トシよ觸トシて足トシと摩トシき。自歎せんと
あしき。吐嗟トシと驚トシく母妹トシと共トシよ里人トシえ騒トシ。背トシよう抱トシき。死
まんとして走トシて走トシる。せやくふ推トシをえよ。若きがくと。とて三十餘
年の娘トシをあくべ。さもあくべのうぶら。俄頃トシの發トシこうるごと。頑トシふ
汝トシの金と配トシかせんといふと。やてつまと誘トシふりのうぶ。あくべ重トシみ
任トシてよせん。金も一百五十両トシ。三よこうちて一つ娘トシへ残トシる二つ鷲太郎
阿トシ。汝トシホふあくべ。同胞トシこうとひよほして犯トシと娘トシひちあふせよ。ども

つ。金衣投とせば。みみもとくれきぞ犯と子面をあひて息を喫た。五年
あまり苦心せし。金一枚も手ふつけど。賜もとそうけらるべ。欲あへこの
まみと推返を承。若き又搔遣て。されば盜よ糧を齎す世の常言
勞と功を言ふ。惜る物を手んや。惜むば黄金も馬石ふ等。こまと
推辞へ其あが志とあらぬよ辭もう。一文不通の吾儕りれど。世の貸と
ひねり只をゆよとす。わうとあふ昨の非とあらざが物をのみこそ承へ
清けき。さればとて放りて。金衣とくらむるをひそ。阿刃ハコふ罪あれ
ども。五年貧死家を守り。秀太郎の偽ありとも。失と悔ひ。犯と慕ひ。この
孝の賞とく。その勞も亦賞焉べ。どくも則姨へ孝養。兄も妹も念を
かけしる。金衣とどく。と祝示して。遂よぬとびんぐと。松山と惣ら
こまとくんで。腰る扇と楓と聞れて。若き衣ぬかきこそ。儕四あると丈

夫。これなほすもけり。て。好女と獲する。狂歌ひのあまく。嗚呼
されど。志と洋ふ演ん。古僻少く。より利欲ふ迷ぞ。只直とりて貿と
も。されば。井瓢の一生経遊。跡のほ。されば赤坂よ住とびて野上の里ふ
移住じ。させる犯族もゆかぞ。只一個のホアの。彼へとゆひ。所縁ふ
つたて相撲へ赴き。化粧坂の亡八る。風流。蔽澤屋が女婿よろり。養父乃
生業を兼つたて。向眉の長と呼る。は。風のほうふ吹くとりども。正直も
彼がせうるの。人をあらぬと厭ふがやうよ。終よト。よびも音耗せだ。あふふ
和殿。この年。ひが才ふほまで。化粧坂ふ在せよ。昨夜をひよ吹くうち
まきれふ。さへえ。亦是不善の縁ゆ。だや。つらくと觀そ。人の世の幸不幸も。清と
濁ふ。ふよる。あらわしだ。壁。このち六がどれ。考みて才あん。こまとある人
を絶てみけり。が。与惣が家の下女とありて。裳長紀衣も。おもひ。ど。又憐む。まこと

ゆうござや。人の家ふ妻より。裏さけする夜の如。和殿り。捨ゆれども。
この女子を娶つま。これ寛ふ良縁なり。吾婿媒妁を。きみどりが告言
うち向う笑ひ。数りぬ身をかくす。ひそめたり。おとづれ。おとづれ
あざら。駿馬へ駄駄よ駆くぞ。こぶ家の徳を。たゞして。から賢女を娶り
きだ。世の胡慮より。やせん。と推辞。ごとく。うら掉り。つる簾退音
るふよ。この夫あてこの妻わ。赤繩の係。所へ推辞。とも服事。が
けん。吾婿えま子を。舉ぞ。妻ふく後まく。よ。と一浪のうわ悲かな。
今もひと養はす。と。和殿小こ豆と配。もる。死へ。雨中。小枝と獲。うがに。
か。か。意り。ふぞや。と。向べ。忽地。顔うち。被め。親同胞も。また。身あ。仰え
嫌ふ。のあづ。苦。言。ぬ。ふ。諾ひ。り。と。もの。や。うと。處く。と。里入。ホ
さ。と。お。あ。れ。散動。あねり。と。生。松。あ。れ。ば。入。松。う。不。盆。あ。れ。ば。盆。子。も。あ。り。あ。う。も
け。の。黄。道。吉。日。目。今。婚。姻。し。の。冒。九。郎。ぬ。阿。丑。ど。の。い。よ。後。易
や。じ。し。と。秀。立。て。若。主。も。ひ。と。ひ。と。ふ。を。と。せ。又。冒。九。郎。と。阿。丑。と
つ。ぐ。て。この。両。夫。婦。と。祝。り。り。る。も。婚。姻。の。盃。を。と。結。と。想。が。死
な。今。様。ふ。千。秋。萬。葉。と。歌。ひ。か。あ。ふ。け。と。バ。馮。司。運。せ。ホ。よ。や。く。永
安。堵。つ。と。言。と。想。を。教。む。エ。君。父。の。母。と。ふ。侍。す。が。如。く。い。と。傷。痛。ま
さ。よ。猪。瘦。の。辭。を。述。更。よ。里。人。を。勞。へ。が。若。主。ハ。人。の。貌。の。こう。を。精。一。て。絶。て
考。え。送。よ。恨。を。送。ま。と。ぞ。誓。ひ。る。よ。て。又。連。せ。ハ。與。想。ふ。對。て。り。ゆ。く。わ。子
み。お。う。お。太。郎。ハ。幼。稚。き。時。別。ほ。しき。が。仰。る。も。あ。だ。仰。り。し。ち。ま。新。み
け。も。く。る。く。彼。不。あ。ふ。の。も。う。く。で。お。ん。お。ハ。又。彼。が。あ。ふ。舊。恩。も。う。じ。主
ま。は。と。笑。く。る。毎。ふ。面。あ。く。て。お。う。に。言。禁。も。ほ。と。福。ど。此。の。欲。び。の。お
とり。て。舊。恩。を。あ。し。り。し。と。勧。解。み。け。と。バ。馮。司。も。こ。豆。と。執。あ。し。現

古毛筆本
元治元年
三月

共結絲羅山海固

永諸琴瑟地天長

善吉



玄同菴

よ
うと
うすく
まく
みの
脊の
ゆきとねを
りきくぐ
る

人の家のかうへ間かあくねども。子とちよ道よ迷ふとへ。亦と人のうちだ。
吾嬢ふ男女両個の子あり。家子ひとまつら。冒九郎。次うす。女兒と二女と
いびふ。まづ六の歳の夏多賀祭祀よねてあたる。途みて人ひ奪ひ去
らき。今かその存亡をあいだ。かくて一個の男児。家の柱と愛み。かうの
ちふ育る程よ十年。己亥ふ母ひ又やう。ひよ。やんく教と缺。恩愛
わが子の仇とあうて。かる私厚を堪忍。親の愚と外目。ひひあくぞ
かへさん。か一子と舉て。若き如くもあべつたう。身の幅廣くわる
がれ。教かえき人の才やうせぬりのとそ。社健の淳とごうへ疎」と。か
遅也。嘆息し。まば辞と失ひ。かくて馮司へ。若きと想ふ。辭別して。
ひとえぞまぬ去まで。昌九郎。阿丑ホヘ。終て一言。わともるひへど。背向ふ
きて。わしげ。里人ホカ秀引。遅也。うだ盜ひ。金と袂と。袖
入り。舟ふ離き。猪太郎も。やうやく。立廟と。ゆく。懷を押へつ。里人ふうち
離り。母の後方か従ひ。門をひき。かく。やけ外へ逃げり。けん。
えの後。やがて。往方も。往方も。あれど。うけり。する。禮よ。かへり。あぐ
衆人のゆき去と目送り。下りて。吻と息と。つれ。舌を。脚の娘。され
ども。ひと。追。老女よど。まよ。夜。曉。じて。ひそく。ふ娘ひ。び。又
禍を惹きやせん。と。ひすりのとして。けり。おと。のと。ひ。の。禍ふ
り。の。が。稍。久。く。被。ぬ。闕。窺。け。し。と。見。酒。薦。の。室。中。み。て。賓。さ。ね。の。舞
や。ぶ。嬢。ひ。前。村。長。ふ。の。浮。ゆ。す。か。寔。も。浮。ど。馮。司。グ。益。を。举。ふ。每。夕。
嬢。ひ。而。して。外。目。ハ。汎。ダ。く。入。せ。そ。の。底。意。ハ。村。長。と。辭。セ。と。も。り。ふ
あり。且。その。おり。を。ゆ。ゆ。ふ。教。も。る。ふ。紙。て。愛。こ。り。疎。よ。紙。て。紙。深。し。元
らふ。う。推。量。る。ふ。嬢。ひ。も。又。村。長。と。情。由。あ。う。そ。お。と。倒。て。そ。の。子。く。と。夫

婦せんとてりう共よ櫛を盜せ彼金死累奪せ」^{カの}る。ビシダク
ミテ志あひ袖と信もつて密詔べと鷹も傍かうら点ひをひ眼力極むそ
す。だと打越へ外をともこのこへ違ふべく。毒ある花の人と薙せ刺す
魚ハ汀ふある骨肉のうとて親ちば毒惡のゆふ階き。けとゆく乞を
放し。と疎せば若々又メキたるゆと釋て。づく所代のうれども。サホ
ある人のたのゝみ親族常ふ交かて足ざる死補ひ窮厄を賑へ。送ふ
技助られ争ふとのあらうんのミ。あくろ死吾脩不肖ふて姨も憎き
タベ呂ひを束て害と受るん。さてそのう著うじ。推量とて姨を
疑ひ讐歎のうひととある。人入りきとぞとりんや。外あす度。もひを
聞巻とぞもあへざれ。ちふと勢への身さめく。か疎めり。姨にへどもいれ
ツもあれ。上臺親子へ毒石たり。彼等既ふ衆人の中ふくそ。づく死
辱死スラウダラ。陳ちるふ辞うけまば。阿肉々くとてゐると。ども。づで
害をと食ふ。さう。後ふ率ふ觸き村長の權威りて。隔々うみあう。
脇と喰とも脱せざりん。彼をおひことをやふよ。ふ在そん甚危。おぐ
野上まで退ひて且く毒氣を避ひ。理う。とば若吉ひ。すやく不承ひて。
次の日遅也阿丑ホ。御翁夜具う。どごて彼ホが物と名けろ。皆。皆
ひとくしつへと雇ひ。馮司が宿所へもア遣。且代外へ移住のうと告
些の田園と。人よ管ひて耕。家へひとぬり。されば。こととが僕て承う。く
打拂。又ふ里人。又別と告。よ葱を六七。よ伴。三里を生んと。もる。されよ。から
又祖の墓へ。猪。花をねそえ水を汎だ。やう。う。家の艱。よ已。と。おも。且
美濃路へ赴く。う。如意中。よ述。坐ふ。候。よかた。く。する。孝子の歎きを推
量。うち。おも。おも。うち。念。夫婦。よ考。よ。清。きて。野上へ。ぞ赴き。や

よ熱へ若き氣いと信すふ慰りつ。親之子ト久も深うじうべ。おひなをと。
景也も又与熱と主の如く親の如く。聚ひ冊まで。今夜までふ暮すてり。
されば与熱も景也と。うがく苗んとおりふあくまひも遠く謀りて。
馮司親子をあくからそれとの知も。二夫川へ近う。岐嶋路のつぐみが
故ふはとべ。夫婦が刃の眼をあわせ。どもやもして兩三年を彼地よ達じ
た。行とんとつぶ。若きも又岐嶋へ赴んとをふとまぐりれば。お熱の竟は苗ね
かくて。些の本筋とよもせ。夫婦訪びて月こうの庇を謝し。雪む。渭
川比野上とよもて岐嶋へ赴き道次る。白屋と購得て。おもて膝を容
よれども。えまらひ決する生業もほ。あくねよ若き。稚きう。細工を
好み。入をうごども。お六ぐまをみて。歎危と脱毛。やまく良縁を猪。めり
その母の像見る。櫛が媒妁あるあり。彼とひ此とひ。大々くうぬ間縁
あれ。木櫛と挽て賣んとて。夫婦こま下ろ。力と裁。善き賣へ日とみく
夜と。櫛と挽て。ち六ふこまと賣むる程ふ。京簾倉へ往來とぞりの。
殊文と殊重。かるふぬの土産あれ。こまふすく家累もほとて。お六櫛と
ゆびみく。一人とて買ざる。うけま。京簾倉りく。さと。その名被紫不
るく。ゆゑて。活業ふ繁昌。僅三年をうぐ程ふ。ゆく。さと。ふすく人ふすくに
けり。あくねども若きち六ふ。卯も下のを忘れて。常小野上へ消息て
物と贈り。月とて。与熱が安否と問ざるて。るく。日とて亡親のとを
ざる。うれむ。おとねば今一。相模へ赴き。白眉の長不見。ま。且
とあと白眉と見。秋頃。るにめて。受ける恩答。と。のとせつま
暇。うけま。然止ま。嗚呼。賢なる。この夫婦。進むと。既へ孝として
退くと。既へ忠として。財と獲て財ふ迷ひ。こまふ散して。ふ富。か



奇みて妙みよどや。そんふれあひで上臺馮司へ世の人の幾をかりり、
昌九郎小阿丑を妻し。こぶ子の妻の母うりべとて。遼也とく遡うりぬ。されば
か六が猜せ小違ひぞ。馮司へ遼也と情由あひが言音が家を售て。羨儂
路へ退ひると。竊か飲び遂不憚る乞乞く。遼也と妻と呼び。良人と
稱られ。子どもへこそ。親も又淫樂とみにして。ごろおらく驕。程よ裏ふ
若吉が。遼也阿丑ホふとし。百金へ只一年。が程ふ水の如くつひ失ひ。
剝若吉が田園と横領して。酒肉の料ふ貪生下も飽ぞ。里人ホハ苛く
せあつべ
責使きて。課役ふ苦ミ。領ふうらも憤るの。權ふきくれていふりのみ。
やくて兩三年過む。従ふ馮司が世帶す。やく傾き。驕らんとす。ふ殊
るけま。密ふ昌九郎と謀りつ。里尽外うり。秋と夥伐じて
賣て。あらわふこの外へ。番場と封疆と相難へて。法華牛堂の境を内
うべ里入多ひ。稻あらく。蝗の失ふる如く。故と限りは。さて。物人を。せふ
せんとて。由緒あるの。穿鑿せふ。ふ原二夫の村長と。蚕屋渠長と
ひよりの。数世承りたうけるが。その子若ニが年少なり。而まじて後赤
堀を。今見小岐祖小ゆ。彼はその性いと老實なるの。かひ。子
やて村長と仰す。さうなりや。と。里の老ども。がおもひ。満信これと
ゆきひて。そののとく。居まじと。懲て。若と。食ふ。居まじ。かう
若吉が。ひゆうけ。守の下文到来し。久野上り。松山と。脚力と

りて。馬司親子が顛末。此度の吉事と告ふけと。がむかと。ゆきとこと。
見て。且驚ひ且歎び。未と。さが老實なる小町。小守と。夫婦へ猛。よろはる
きて。近江へとゆき。往ふ日を経て野上の里まで來ふけり。この日。与あ
里。尽くぬふ歩迎へて。送。懸る。再會の歎びと。遂直小宿所へ移り。行を
この夜。へ野上ふ足と休め。次の日。若者。夜裳と。整て。多賀の陣所へ
ありしき。郡司對面して。二夫の村長。ふす。身と。ゆみえも。守の
仰と。つらしき。若者。感謝。御小堪じて。おそらく。言受。且く野上へ退
こそ。お熱ち。ふす。と。被令。舊住ひ。する母。そりへ新。小家。移。と。音月と
トつ。二夫へ移徙。あそび。る。の為。序。たゞ。あふ。か。ば。う。も。の。だ。と。上
親子。れ。こ。と。を。見。て。ひと目。ざほ。く。と。お。ふ。も。媚。を。と。限。り。な。け。と。が。つ。る
あ。て。着。を。と。推。倒。て。冒。九。郎。と。村。長。ふ。せん。と。て。運。也。も。膝。と。つ。れ。あ。じ。

阿忍も頬をやがて。昌九郎りうとも小。毎日小密禮をされどソドモ
若きへ村長を今下せられ。その日より守を教ひ里人を憐もしゆも。
親疎ふうりて私せど一鳥がすくも失ひけど。奸智小肥する上臺
駄子も。その隙を獲かくて歯を切りつゝ下風か立怨を隠して日を
送りぬ。夫吉凶と絶る索の如し。吉もひまむきあひ。凶もひまむきあひ
あひ。雄り塞翁が馬あひ。天福天禍既ふ時あり。次て人の作る
所。吉凶更ふりくべくべ。善人の福。悪人の禍。あるある。賢者
訪ふ所。不肖者へこゑを憂へ。智者へのき。愚者へゆ。毀る畢竟
馮司昌九郎ホ。又つづき。奸計をうと。そん次の巻小解已くを
あそん。

